

みんなで語り合う人権学習は、 すべてを変える

TiOveR人権こども塾の挑戦

吉成正士 TiOveR人権教育研究所・人権こども塾共同代表

はじめに

いま、私のまわりの教育現場は、「世界に通用するような学力を！ 英語力を！ その手がかりとなるような授業力を！ ICT教育の推進を！」という声に踊らされているように思えてなりません。世界における日本の立ち位置を考えたとき、少子高齢化問題は、労働力確保の点で大きな課題でしょう。それを補って余りあるような国力の保持を考えると、能力主義、

効率主義となり、それが学力優位主義、経済中心主義につながっていくのも、当然の道筋かもしれません。ですから私には、「経済！ 経済！ 経済！」の呼び声は、「金！ 金！ 金！」のようにしか聞こえず、拜金主義のようで、すごく気持ち悪い思いをしたのです。まるでかつての「殖産興業」「富国強兵」のように聞こえました。ですから最低賃金についても、「上がってよかった」で済ませていい問題ではないように思えたのです。

明治・大正期、一方で何が起こっていたかという点、安い労働力の確保、生産性に見合わないともなされた人たちの排除と蔑視。つまり、公然と差別構造をつくりだし、意図して差別意識を生み出してきたように思えます。その思想は、戦後、民主主義への変遷とともに大きく変わったはずですが、旧優生保護法などの人権侵害や多くの公害訴訟を考えると、この国はその思想を再生産してきたといわざるをえません。ですから、やはり同じことを繰り返しているような気持ち悪さを感じてしまうのです。

人権教育への取り組みを見ると、それは押し潰され、世の中がおかしい方向へ舵を切っているのと並行して、人権教育そのものもバランスを崩し、おかしくなっているように感じます。「学校は学力をつけるところ」を全面否定はしませんが、決してそれは受験に特化した学力ではなく、学ぶことをとおして世の中を正しく見つめ、正していく力をつけること。よりよい社会について学び、考え、創り出していける力をつけることだと思っております。人権教育は、その大きな

担い手でした。それがいまや、「もう人権教育はいいから」と言わんばかりの状況です。そしてそんな波に飲み込まれるかのように、若手教員への継承は息をひそめるようになってしまいました。

「人権教育はすべての教育の根幹」

これがおざなりにされる日本社会は、人権への関心が低いままということ。かといって、個々の人権意識は低いわけではなく、自分への人権侵害や他者の忌避については非常に敏感な感覚をもっているように感じることがあります。つまり、自分を守ることや、他者を非難することには敏感だけど、人とつながることには鈍感な人権感覚です。もしかすると、ネット社会も影響しているのかもしれませんが、いずれにせよそれは、私たちが大切にしてきた「つながり」社会ではなく、「分断」社会です。

人権こども塾とは

このような状況下でいったいどうすればいいのか、何ができるのか。考えた結果として、二〇一九年にT

lover 人権教育研究所を設立しました。
 「T(たがいに)lover(越える)、T(ともに)lover(越える)、Talkover(じっくり語り合う)」

これまで徳島県内で、中学生が主体的に自らの思いを語り合うことをとおして、いじめや差別をなくしていく取り組みを実践してきました。多くの教員仲間と長年にわたり積みあげてきた「全体学習」や「みんなで語り合う人権学習」、「人権を語り合う中学生交流集会」といわれる実践です。この実践はいじめや差別をなくしていくだけでなく、自己や他者の存在の大切さを実感するとともに、思いを伝え合うことの意味、人とつながることの大切さ、学び合うことの必要性など、多くの学びがあることを実感してきました。しかし、その実践自体が独自の取り組みのため、なかなか広がることはありませんでした。それを広く伝えていくための自主的な団体が、Tlover 人権教育研究所です。

その一方でコロナ禍以降、学校現場で激減している

松茂中学校)、計一九人での活動となっています。

人権こども塾は、学校では十分できない人権学習について、「対話」することをコンセプトに学びながら、社会や自分の生き方を見つめ、考え、行動に移せる子どもたちを育成する場です。モデルはどこにもありません。これまで私たちスタッフが得た知見を駆使しながら、協力を要請しながらの道のりです。このあと、その具体について記します。

二〇二三年度の取り組み

□四月二三日 二期入学式・二〇二三年度開講式

□「人権を語り合う中学生交流集会+23」への参加
 この集会は中学生をメインにした人権集会であり、発足して二九年になります。県内の参加校で準備会である実行委員会四回を経て、最終は県内外十数校で本大会に臨みます。講演会や中学生による人権意見発表、またそれらをもとにした討議など、中学生の中学生による中学生のための人権集会です。

・四月二九日 第一回実行委員会

人権学習を補い、かつより発展的なとらえが可能となるよう、意欲のある中高生を対象にした「人権こども塾」を立ち上げるタイミングを計ってきました。そして二〇二二年、二〇〇二年の法切れから二〇年経った年、Tlover 人権教育研究所を母体として、人権こども塾を始めることにしました。

人権こども塾立ち上げ時、二〇二二年度のメンバーは、その前年の「人権を語り合う中学生交流集会」に参加していた中学生を中心に声をかけました。二〇二三年度は、前年度一期生として活動した、高校生三人(徳島市立高校、徳島科学技術高校、富岡東高校)と、中学生六人(八万中学校、吉成勤務校、松茂中学校、共同代表の森口健司勤務校)、計九人に、新年度二期生として新たに加わった六人(八万中学校)の、計一五人でのスタートとなりました。これは途中入退塾を経て、最終的に一九人となります。

ちなみに二〇二四年度は、新年度三期生七人に加え、高校生四人(徳島科学技術高校、徳島商業高校、鳴門渦潮高校)と、中学生一五人(川内中学校、八万中学校、

・五月二七日 第二回実行委員会

・六月二四日 第三回実行委員会

・七月二二日 第四回実行委員会

・八月六日 本大会

□六月一〇日 「命と向き合って」講演会

□八月二三日 「鳴門市人権地域フォーラム」への参加
 おとな対象の人権啓発の会ですが、当塾の「対話」というコンセプトを生かし、中高生にも発言を求めます。飾らないことばで自らの思いを懸命に語る姿が、参加しているおとなには新鮮に映ります。子どもとおとなが同席してそれぞれの思いや考えを語り合い、聴き合う場合は、思う以上にありません。子どもにすれば、話を聞いてくれるおとなは親や先生くらいで、おとなにすれば、基本的にわが子以外の子どもから話を聞くようなことはありません。その意味において、こども塾の存在意義は大きいといえます。

□九月一八日 「狭山事件」講演会

□一〇月七日 「在日問題・ヘイトスピーチ」講演会

□一〇月二二日 「四国朝鮮初中級学校交流フェス



みんなでトークオーバー・人権子ども塾文化祭2023で語る中学生（2023年11月）

- 一月一八日 「PTA親と子で人権を考えるつどい」への参加
 - 二月九日 「人権クリスマス会〜一年のふりかえり〜」
 - 二月二三日 「SAG徳島」交流会
 - 一月二二日 「人権農業体験・峠スピリット」交流会
Tlover人権教育研究所クルー（メンバー）の一人が営む農家に向き、農業体験をします。大根を掘ったり、ヤギの世話をしたり、新春ということもあって餅つきをしたりして、つきたての餅料理をいただきます。おいしく楽しいひとときです。このクルーもかつての教え子で、自分の農業の原点は中学時代の「全体学習」であると公言します。そんな話も伺いながら、塾生の人権に対するとらえを揺さぶります。
 - 二月二三日 「識字問題」講演会
 - 三月二〇日 二期卒業式・二〇二三年度閉講式
- 全一八回の講座となりましたが、あっとい間の一年間でした。すべてが手探りでしたがほんとうに充実していました。その時々の様子については、ホームページ



四国朝鮮初中級学校交流フェスタでの合同記念写真（2023年10月）

- 「タ」への参加
 - 前回の在日問題についての学びを生かし、県外（愛媛県松山市）に向いて交流フェスタに参加します。いつもは見られる側の参観授業ですが、ここでは朝鮮語で行われている授業を参観します。また朝鮮由来の歌や踊りを鑑賞するとともに、共に参加して合唱も披露します。日ごろの生活とはまったく異なる生活文化に、プラスイメージとしての学びを得ることができました。
 - 一月五日 「みんなでトークオーバー・人権子ども塾文化祭」開催
- 人権子ども塾のこれまでの学びの発表会です。第一部では、舞台に立ち、塾生が人権問題に対する自らの思いをそれぞれ語っていきます。第二部では、重監房資料館の黒尾さんと独協医科大学の木村さんからハンセン病や放射能汚染についてのレクチャーを受けました。第三部では、塾生も参会者も含め、全体で、ハンセン病問題やさまざまな人権問題について語り合い、学び合います。

ージ (<https://lover.net>) をご覧になってください。
閉講式は一〇人の出席となり、途中から参加する中高生が出てきたのは、うれしい誤算でした。式には関心を寄せてくれるギャラリーも参加してくれました。認定証を贈呈したあと、最後のトーク・オーバーを始めます。その一端については、後述の「選んでくれて」をご覧くださいと思います。

どの講座も最低三時間の設定です。当事者から直接お話を聞いたり、現場に向いたり。話も聞くだけではなく、対話的であることを前提にします。学校では学びきれない学びが、こども塾にはあります。そして私たちも、子どもたちと人権について真剣に語り合うことができます。それは子どもたちのこれからの生き方を問い、見つめなおすことにつながっていききました。つまり人権について学ぶということは、自らの生き方と向き合うことになるのだということを再確認させてくれました。

していき、部落問題、人権問題に本気でとりくんでいくことの必要性と重要性を訴えることになりました。松茂中学校での人権学習の冒頭に、私がことばを添えます。

語り合いの人権学習は、「自律、協働、エンパワメント」を育んでいく学習です。「自律」とは、規範に従い行動することです。それは人権学習において、自らの意志で挙手し、主体的に思いを語るといことです。「協働」とは、大切な仲間と目標を共有し力を合わせることです。それは人権学習において、一人ひとりの思いを語り合うということです。「エンパワメント」とは、共に全力を尽くし、自他共に自信をつけるということです。みなさんは、人権学習において、共によりなる仲間づくりを語り合いのなかで築きあげています。

語り合いの人権学習の本質である「自律、協働、エンパワメント」の意味を、板野中学校三年B組からみなさんはどのように感じ、学びとることができました

松茂中学校への拡がり 森口健司 共同代表

ここでは、人権こども塾に参加するメンバーの活動が、学校でどのような拡がりをみせていったかについて、その一部を紹介します。

昨年度七月、「板野中学校三年B組に学ぶ」をテーマに、自分自身の思いや願いを語り合った人権学習を紹介しました。「板野中学校三年B組」とは、私たちがとりくんできた「全体学習」や「みんなで語り合う人権学習」の原点となった学級で、この板野中学校で吉成、森口は同時期に二年間勤め、実践を積み上げてきました。「板野中学校三年B組」では、部落問題について本音で語り合うことをとおして、部落差別の実際、学級づくりのありよう、人間としての生き方について、互いの思いを共有する授業を積み重ねてきました。この学習スタイルはのちに、学年全クラス合同で行う人権学習「学年全体人権学習」や、校内全クラス合同で行う人権学習「学校全体人権学習」へと発展

か。みなさんに観てもらった三年B組の授業動画の後半は、終始生徒の語り合いで展開されました。授業者の私は、次から次へと挙手する生徒を指名するだけでした。そして最後に、「三年B組の絆」と板書して授業を終えました。この、次から次へと生徒一人ひとりが挙手し、思いや願いを語り合う人権・部落問題学習が、文部科学省の道徳教育読み物資料のなかに初めて部落問題にかかわる資料が掲載されるきっかけをつくってくれました。このような授業を板野中学校三年B組の生徒たちとできたことが、私の人権教育・同和教育のよるこびとなっています。この板野中学校三年B組の語り合いから学んだことをいきいきと語り合う授業をみんなで作りますよう。

問いかけに、次から次へと手が挙がっていきます。生徒の語りを無言で受け止めていきました。授業は生徒自身の主体的な挙手によって深まっていきます。その学習スタイルは、板野中学校での「全体学習」や「人権を語り合う中学生交流会」の語り合いのよう

に、生徒一人ひとりがマイクを握り、みんなにむかって思いや願いを語っていく学習となりました。それは人権こども塾での語り合いとそっくり重なります。ボクも語りたい、私も語りたい、繰り返す挙手し、発言を繰り返す生徒が出てきます。

ボクは言いたいことがあります。みなさんに家族と友達は絶対に大事にしてほしいということです。みなさんに一個やってほしいことがあります。きょう帰って、お父さんお母さんに「いつもありがとうね」と伝えてほしいです。たぶん、絶対喜んでくれると思います。

もうひとつは、友達を大切にすることです。友達とケンカしてしまって、仲直りできずに過ごしてしまう人もいます。でも、ケンカしたら先に謝って仲直りしてほしいです。友達は絶対欠かせないものなので、大切に大切に思っしてほしいです。信頼できる友達を見つけて、わからないことがあったら友達に聞いて、一緒に仲のいい友達と協力してケンカのないようにがんば

によって、少しずつ差別などが減っていったと感じた」と素直に語ることは、部落問題に無関心な人たちに届けたいようなことばでした。

私は、板野中学校の人たちが部落問題についての学習をしているのを見て、やはり部落問題について考えるといった同和教育は必要なんだなと思いました。本音を言うと、私は前まで、人権・同和教育をすることによって差別をすることはいけないと意識はされるが、それと同時に、差別を知らなかった人に対して差別が生まれてしまうことがあるのではないかと思っっていました。しかし、同和教育を行うことによって、少しずつ差別などが減っていったと感じたので、これからもこのような同和教育をしていく必要があると思っっていました。

板野中学校の人たちが部落問題について学習をしている様子を見ると、みんなが、部落問題について考え、意見を出し合っていて、みんなが本気でとりにくんでいたの、このクラスでは絶対に差別など起こらな

ってほしいです。

力強い、いきいきとした語りが、クラスの雰囲気であたたかくしていき、次から次へと発言を生んでいきました。「友達とケンカしたときは、先に謝って仲直りしてほしい」ということばに心揺さぶられた生徒がすかさず手を挙げ、思いを返します。

さっき、友達を大切にすればいいみたいなことを言っていたことについて。ボクは何回かケンカしたことがあるんです。それでボクはいつも最初に「ごめんなさい」と言えないんです。「ごめん」と言ってくるから、ケンカしたら、なるべく先に「ごめん」と言いたいです。

授業の最後で、家族から刷り込まれてきた「寝た子を起こすな」意識が大きく変わったという発言がありました。同和教育の重要性をしっかりと学びとった生徒のことばには力があります。「同和教育を行うこと

いのではないかと思っました。このクラスの人たちのようにみんながなるには、一人ひとりが自分の問題として考えることが大切であると思っます。また、差別をなくすには、社会全体が人権に配慮するなど、サポートする必要があると思っました。

部落問題などの問題をなくすために、自分ができることを考えてみると、部落問題について正しい認識をもち、日常生活のなかで人権感覚を磨いていくことではないかと思っました。以上のことから私は、部落問題について正しい認識をもつことと、日常生活のなかで人権感覚を磨くという、二つのことを実行していきたいと思っました。

松茂中学校の人権学習においても、人権こども塾のテーマ「みんなで語り合う人権学習は、すべてを変える」を実感します。しかし人権学習の場で語れる生徒ばかりではありません。それでも次から次へと手が挙がっていくクラスメイトの本気のことばは、クラス全体を癒し、生徒一人ひとりのなかに、そのクラスの一

員であるという誇りを生んできたように思います。人権こども塾によって培われてきた、学校の枠を超えて語り合う人権学習を体験した生徒たちが、それぞれの学年、学級における語り合いの人権学習をリードしていくことにより、語り合いの人権学習は大きく前進していきました。すべての学校でとりくまれて人権学習においても、子どもたちが本当の思いを語り合う人権学習、「共感と連帯」「信頼と尊敬」「互いへの感謝」が染み込んでいくような人権学習となっていくことを願います。

選んでくれて

二〇二三年度、人権こども塾最後の日。閉講式で最後のトーク・オーバーをしていいたとき、思いがけず二のココネがマイクに手を伸ばしました。自ら発言することを選んだのです。

ココネのことをきちんと認識したのは、彼女が中一のとき、私が勤めている学校近くのスパーマーケットに入ったときでした。私に出くわして大きく反応し

たのはココネではなく、お母さんのほうでした。私もそれに応えるかのように大きく反応しました。お母さんは、かつての教え子だったのです。お母さんは中高生時代、被差別部落出身として、同対象地区学習会に通うメンバーの一人でした。私も指導員の一人として、日々の学習やさまざまな研修に共にとりくむ仲間でした。そんな中高生時代の経験があったからこそ出た反応だったのです。

その日からです。一人娘ココネに、どうやって自分のルーツを伝えるのか、自分のたどってきた道のりを伝えるのか。隠すようなことでも恥ずかしいことでもない。でも将来のことを考えると、どうしても伝えておきたい。娘と人権について本音で話ができるようになりたいとの相談が、何度も何度も繰り返されてきました。

マイクを握りしめたココネがただどしく語りはじめます。

私の家族で、母が部落出身なんです。それを聞いた

のが中学生になった初めくらいのときで、学校で人権学習を始めて、それを家族に話したときにそういう話をしてくれたんです。母は父に出会って付き合ってから結婚するときに、父のほうの親御さんに自分が部落出身であることを伝えると、部落出身ということで結婚することに反対するって言われたらしいんです。父は母と結婚したいって話し合ったら、お祖父さんから「親子の縁を切るか。母と結婚するか」という究極の二択を与えられたんです。そのとき、父はすごい考えて。倒れるほど考えて。結果は親子の縁を切っても母との結婚をするほうを選んでくれたんです。私ももし父が母と結婚せずに親子の縁を切らなかつたら存在しなかったわけだから、父が親子の縁を切っても母との結婚を選んでくれたので、すごい私は良かったな、格好いいなって。部落のこととかも、何て言えばいいんだらう。親の言うことばかりを意識せずに、結婚のほうを選んでくれたのがすごいれしくて、すごく感謝をしています。自分の意見にまっすぐなのがい

私は知っていましたが、それでも本人が選んで自分のことを語ったことには驚きました。ココネは進んで話しはじめるタイプの子ではなかったからです。ましてや、そんな背景を知らなかったメンバーはほんとうに驚いたと思います。やはりどこかで、部落差別は本

のなかの出来事、昔の出来事だと思っていたらどうやらです。よもや同世代の、しかも身近な存在の仲間がこのような思いをしていたとは、露も知らなかつた

ろうと思います。話し終わったココネに私はことばを返すのですが、その眼は私のことばをしつかりと受け止めていました。

その日のうちにお母さんに連絡をし、ココネのことばを伝えます。

先生、本当にありがとう。何度も何度も読み返し、その場の状況を思い浮かべて一人泣いちゃいました。嬉しくて。娘は私の知らないうちにこんなにも成長しているんですね。そして、きっと私が思ってる以上に

たくさんのことを考え、感じ、ココネはココネの世界でいま、自分に起こる様々なことを乗り越えていこうとしてるんだと思いました。これは人権こども塾での出会い、経験があったからこそ、親子だけの関わりだけでは絶対に得られなかったものだと思います。すべてがここに繋がってたかのように導いてくれたことに感謝しかありません。こうして打っているとラインでは伝えきれない思いがたくさん出てくるのですが、それは会った時にまたお話しさせて下さい！

同じような境遇で悩んでいるかつての教え子はいないか、気になります。時代とはいえ、地域や保護者からの要請とはいえ、立場学習として中学生に部落出身であることを伝えてきました。そのことが果たして本人にとって良かったのか。いまの日本社会がほんとうに多様性を認め、多様な価値観を積極的に受け入れるような社会に変わったのか。さまざまな社会的弱者や少数者が排除されずに尊ばれるような社会に変わったのか。そのことを思うと、どうしても「やっぱり言え

おわりに 希望の光

今年度になり、高校生のミオが入塾しました。昨年度、思わぬ出会いのなかで途中参加するようになった中三のミオは、秋に開かれた「PTA親と子で人権を考えるつどい」に参加し、まわりの雰囲気飛び込むかのように手を挙げ、語りはじめました。

学校に行けない日が続いていたとき、遠足に行くかどうか悩んでいると、特別支援学級の友達が「ミオちゃんが行くなら行く」と言ってくれて、私は行くことができました。行動も一緒だったり、バスの席も隣だったりしたんですが、帰りのバスで、「きょうは来てくれてありがとう」と言ってくれて、それが私にとっては何よりもうれしかったです。

訥々と、一言一言を考えながら丁寧に語る姿に、あたたかい拍手が広がっていました。ミオのなかにどんなエネルギーが潜んでいるのか。

ない」になってはいないか。そのことが気がかりで仕方ありません。だからこそ、大きく広く、人権こども塾の存在や活動を拡げる意義があるのだと思います。

ある日、娘の中で心揺さぶられ、自分を解放できる喜びの瞬間、それを分かち合える仲間がいてこの喜びを体験する瞬間があったようです。その日の夜、娘は不器用ながらも私に伝えようと言葉を運び、一生懸命目を輝かせ、その時のことを話してくれました。時を経て娘と人権についてこんな話ができる時がくるなんて、親として嬉しすぎて一緒に泣いて、笑って、遅くまで話し込んだ、そんな良き思い出でした。

ある日のお母さんからの連絡です。親と子がさまざまな思いを越えて、互いを認め合い、思いを共有し合える、そんな家族関係が全国どこにでも広がっていければと強く願います。

わからないまま、高校生になったミオは、毎月の集まりに意欲的に参加してきます。

今年度初の試みとして、夏季一泊研修を開催しました。七月二十七日朝、一七人の塾生と六人の塾スタッフ・保護者がチャーターしたマイクロバスに乗り込み、岡山県のハンセン病療養所・長島愛生園（ながしまあいせいえん）へと向かいます。行きのバスから、自己紹介としてそれぞれが参加への思いを語っていきます。

昼食をとったあと、歴史館で職員の方からお話を伺いました。その後、園内をフィールドワークするときも、入所者の方からお話を伺うときも、塾生はみんな真剣な表情そのものでした。夕方からはみんなで自炊し、カレー作りをします。年齢も校種も違うみんなの距離が縮まります。

そして夜の研修会。ミオは自身の両親のことについて初めて語り出します。そこに彼女のエネルギーの源を見た思いがしました。その日の彼女の感想です。

私は今年からこども塾に参加しています。今回がこ

この一泊研修を通して、私の将来のビジョンが少し追加されました。それは、「このような差別問題をこれから生まれてくる子どもたちにどう伝えていくか」です。ヒロシマの原爆などは子孫がいますが、ハンセン病患者は当事者（元患者）しかいません。しかも当事者の平均年齢は八八歳と九〇歳近くになり、だんだ

くてはと思いました。両親の思いを自ら引き受け、だからこそ教師への道をめざしていたことを初めて明かします。「どうして教師になろうと思ったのか、どうすればなるのか、いまの自分になれるのか」必死に食らいつくように問いかける彼女の姿に、「絶対こんな子に教師になってほしい」と強く思いました。単に勉強して成績を上げることに注力するのではなく、自分のなかにしっかりとした芯をもち、「だからがんばる」と迷いなく言葉の学力、そんな力を多くの子にもってほしいと思います。彼女の感想は続きます。

ミオのほかにも、中学時代不登校だったカンタは、当時はふりかえり、将来の夢について熱を込めて語ります。自身の吃音（きつおん）について語るアツトは、障がい者問題にふれ、自分の夢について語ります。みんなそれぞれの事情をかかえながら、それでも自分の夢にむかっ

んと亡くなる方も増えています。愛生園では二人しか語ることができる人がいません。だからといって、これから生まれてくる子たちは学習しなくていいわけはありません。だから今のうちに私たちが当事者から聞き、伝え、続けていくことが重要になってくると思います。そして、こういうことが二度と起らないように、自分だけで終わらせるのではなく、周囲の人も知っていく必要があると思いました。そしていつか、この先生方と一緒に働きたいし、この塾にも教員として参加してみたいです。先生が、私が教員になるまで教員を続けるとおっしゃってくれたのはとてもうれしかったです。あらためて頑張らなくてはと、自分に喝が入りました。



夏季一泊研修・ハンセン病療養所邑久光明園納骨堂での祈り（2024年7月）

ども塾のみんなと外に行つての初の学習でした。二日間であくさん見たり、聞いたり、語ったりすることができました。二日間を通して印象に残っているのは、長島愛生園と邑久光明園のの違いです。（中略）「ハンセン病よりコロナの方がひどい」と言われてました。ハンセン病もコロナも両方に通じることは、知識がないから変に怖がって差別をしてしまうのではと私なりに考えました。コロナもいまはある程度の知識がついているから、いたずらなどは初めのころより減りましたが、まだどこかには残っていると思います。無知は恥。まさにそうだと思います。一日目の夜、カレーを食べ終わってから、いつもだと一緒に過ごすことのない時間に語り合いを全員でしました。自分もなかなか口に出すことのできなかった両親のことを語ってすっきりしました。その後もお風呂をすませ、先生や高校生たちと、「なぜ先生になつたのか」などについて語り合いました。日付をまたいで話すことがないので、たくさんゆっくり語り合えて、自分も中学校教員に向けてもっともって頑張らな

て懸命にがんばっています。

人権こども塾に参加する中高生の背景はさまざまです。しかしそのどれにも、その人にしかない、その人だけのストーリーがあります。「みんなで語り合う人権学習」を進めるということは、そのストーリーに自ら向き合うということです。向き合わないかぎり、自分が生きる方向性は見えてきません。向き合ってから一歩を踏み出せるのだと思います。つまりそれは、自ら望んで自己の能力を高められる自分に変容していくということ。強制的にやらされて学力を高めるのではないということです。多くの人が求める、いわゆる「やる気スイッチ」は、「みんなで語り合う人権学習」のなかにこそあるのではないか。そしてそれは、その人の人生や生き方そのものを、すべて変えてしまうだけの高い潜在力があるのではないかということです。

かつては同和対象地区学習会で、子どもたちや保護者ごととんかかわってきました。しかし、それがかわらないまま、部落問題に限らず、さまざまな背景はできない学びもあります。少数である私たちには機動力があります。また、私たちの人権学習はその場限りではなく、中高生年代の最長六年間、人権学習を積み上げることができますし、卒業してからもずっとクルー（メンバー）の一人として活動することもできます。そんな利点を生かしながら、「みんなで語り合う人権学習」を積み重ね、人権教育がすべての教育の根幹であることを実感できる中高生が育てられればと思います。だれかが敷いたレールの上を転がるのではなく、自らの道を豊かに切り拓いていける、そんな若者を育てられればと思います。子どもたちは私たちにとって輝く宝です。光であり、希望です。

よしなりただし

もつ中高生とじっくり語り合いながら人権問題への関心を高めていく取り組みができるのであれば、そんな道もいかなと思います。そしてそれが、未来の日本や日本の教育に結びついていくのなら、そんなよるこびはありません。

人権こども塾の取り組みは、全国どこでもできる取り組みです。各地にある人権にまつわる「人・こと（出来事）・バシヨ」と子どもたちを、具体的につなげていく取り組みです。学びの一つひとつに揺るぎないテーマがあり、そのどれもがひとつの大きなドラマとしての存在感を放っています。それはまるで、一冊の本を早読みしているような感覚です。そこには、本物に出会うこと、「思い（熱）」にふれることの大切さがあるように思います。

かといって、どうやってメンバーを集めるのか、移動手段はどうするのか、運営資金はどうするのか、課題が尽きることはありません。それでも、このような感想を書いてきてくれる中高生がいるかぎり、やめたことはありません。学校でできる学びもあれば、学校で

インクルー